

なごみつうしん

発行日：平成 30 年 9 月 25 日（第 45 号）

発行：島田療育センターはちおうじ

「奇跡がくれた宝物」—いのちの授業—のあとがきを紹介します。
—「輪」を「和」でつなぐ—は、島はちの理念です。

所長 小沢 浩

～あとがき3～

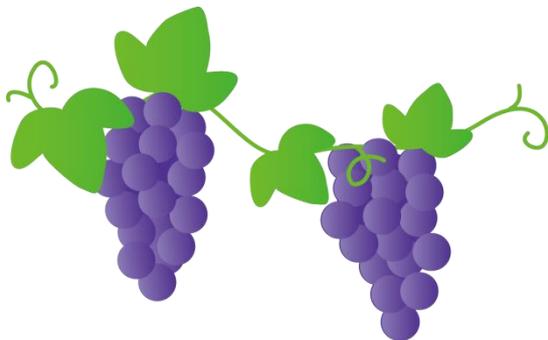
ここに、島田療育センターはちおうじにボランティア実習にきた大学生の感想文を紹介する。

「各々にとっての当たり前があるだけで、不幸だとかいうことではないはずですが、積み重ねてきた時間の違いもまざまざと感じました。同い年の利用者さんが私も小さい頃に好きだったテレビ番組の写真と録音を今まで変わらず楽しんでいること、手が思うように動かさない利用者さんは自分の手を使って何かをしたことがないこと、などに気づいたとき、はっとしました。

ご家族が医療機器を使いこなしたり利用者さんの気持ちを読み取ったりでき、利用者さんもお家族が近くにいらっしゃると喜ぶということに、感動しました。

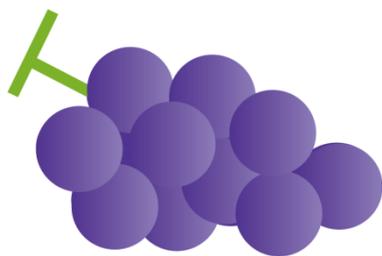
職員の方が、困難で慌ただしい中でも、明るく、利用者さんの気持ちを読み取ろうとし、尊厳を守る配慮を欠かさないことも尊敬します。食事の用意や好きなことなど、一人一人に細かに対応していることもすごいです。足音が響かないように床が柔らかいという配慮にも驚きました。リフトで介助者の腰の負担を軽減することも、初めて知りました。ロボット製作に夢中の学生に、こんなふうに役に立つと知ってほしいです。

外来や通所で出会った利用者さんの抱える問題の切実さに直面しました。知能面の遅れだけでなく身体的な合併症がある方、体を十分に動かさないことが原因で体の調子が悪くなる方がいらっしゃると知りました。通所の方の体がどうなっていたのかをレントゲン写真で見たり話を聞いたりすることで、理解が深まりました。例えば通所の利用者さんは足が平らで不思議だと思っていたのですが、歩かないと誰でも土踏まずができないと伺って納得しました。通所のおかげで褥瘡が改善したという話がうれしかったです。ただ、通所の利用者さんの骨がもろいことなどを知らずに安易に動かしてしまっていたら、と思うとぞっとしました。



職員の皆さんの働く姿を見ること、大学の紹介で活動をすることで、自分を見つめ進路について考えるようになりました。学問に憧れて上京したものの、周りが他人ばかりで友達を作るのに必死で、勉強時間が短くなっていました。実習を終えて、いつまでもモラトリアムではいけないし、大学生として世の中の人の期待にも応えなければならないと思うようになりました。また、私は人間探究の場と言われる文学部に進むつもりですから、いろいろな生き方に出会うことは、学業面でも私を高めてくれると信じています。関心を持つ分野が広がり、冬学期に文学や思想だけでなく応用心理学の授業もとることにしました。

自分の中のことでしかありませんが、障害のある方（このようにひとくくりにするのもおかしいですが）を見かけたときに反応が変わったと思います。以前は、いけないと思いながらも、見かけや行動がいわゆる普通とは異なることからぎょっとしたり、差別意識が拭えず、かわいそうと思ったりしました。しかし、重症心身障害者の利用者さんと長時間一緒に過ごしたり、外来にくる発達障害のお子さんと遊んだりするうちに、慣れました。医療ケアやその他支援が必要なのはもちろんですが、生まれたときからであれば本人にとってはありのままの姿である、こういう人もいる、と自然に受け止められるようになりました。」



皆さんは気づいたでしょうか。この大学生が感じたことは、天城中学校の「いのちの授業」の生徒の感想と同じである。「いのちの授業」の講演を聴いて、大人も涙してくれる。「障害」という個性を知ってもらうのに年齢は関係ない。いつの時代もどの世代にも伝えることができると私は信じている。

「いのち」のこと、「障害」という個性について、この本を通して一人でも多くの人に理解してもらえたらこの上ない喜びである。

出版について協力してくださったクリエイツかもがわの田島英二さん、岡田温美さん、そして田島英二さんを引き合わせてくれた李国本修慈さんに深謝する。

最後に、「いのちの授業」を作ってくれた天城中学校のみんなありがとう！

授業に来てくれて、夜に急遽同窓会を開いてくれたみんなありがとう！

みんなのおかげで、故郷の温かさに再び触れることができた。

「偶然」という名の「必然」で人はつながり、そして広がっていく。

—「輪」を「和」でつなぐ—



『奇跡がくれた宝物』

小沢浩 著

クリエイツかもがわ

より発売中